

特集・子どもの文学この一年

★ 総論

失望を抱きしめて

西山 利佳

はじめに

「3・11」から三年経った。宮城、福島両県の不登校の児童生徒数が二〇一二年に増加したという文部科学省の調査があり、震災が原因と学校が判断したのは、不登校の小中学生一四五〇人のうち、一三人に一人の一〇九人に上るという（東京新聞）¹³・12・11）。避難生活、家計の悪化、放射線への不安……。何も終わっていないのに「3・11」を記憶から閉め出す動きは加速している。そんな中、一つ

の記憶装置としての文学は、その力を発揮すべきだろう。二〇一三年の作品は、この時代をどのようにつかまえているのか。あるいは、読み返す度に、どのように記憶を更新させる力を内蔵しているのか。

作品の外側

安倍晋三政権は「3・11」から二年も経たないうちに命より物種（経済）を優先する政策を繰り出している。その最たる物は原発の再稼働への動きであろう。国内外の絵本作家やイラストレーターなど百十人が参加した展覧会「手から手へ展―絵本作家から子どもたちへ 3・11後のメッセージ」（東京新聞など主催）ほか、子どもの本の関係者も、さまざまな形で被災者への支援活動やメッセージの発信を行っている。しかし、私たちの願いと裏腹に、経済力と軍事力を両輪とし、命を二の次にする政策が重ねられている。「知る権利」を犯す「特定秘密保護法」も二〇一三年一二月に強行採決された。これに対しても、児童書出版社社長などが呼びかけ人となり、反対声明文への賛同署名を集めたり、日本図書館協会、日本児童文学者協会等が